

種を蒔く人

奨励	後藤 聡【ごとう・さとし】
奨励者紹介	日本キリスト教団梅花教会牧師

イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびたしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。イエスはたとえていろいろと教えられ、その中で次のように言われた。「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

(マルコによる福音書 4章1―9節)

沖縄での体験

梅花教会の後藤です。
1998年から2010年まで12年間沖縄で生活していました。沖縄では、小さな伝道所や沖縄教区の仕事、社会福祉施設・児童養護施設や知的障がい者の施設での活動、いくつかの大学で非常勤講師をし、家庭裁判所の調停委員なども経験し、またさまざまな方々に沖縄戦や基地の案内などもしました。
ちょうど今、6月です。沖縄は、沖縄戦の組織的戦闘が終わったと言われる6月23日を「慰霊の日」とし、沖縄県条例で県、市町村は慰霊行事や学習のため休みにしています。ただし、国の機関は休みではありません。たとえば、沖縄大学は休みなのですが琉球大学は授業があるのです。2013年の6月23日は日曜日ですので特別な休みは無しで、振り替えもありませんから、小学生や中学生は文句を言っているかもしれません。
沖縄は、何をするにも何を考えるにしろ、沖縄戦と米軍基地を引きずらざるを得ないのです。この6月、沖縄の新聞は「沖縄戦」の特集が連載されています。先日話題になった「従軍慰安婦」にされた女性は沖縄にもおられました。「慰安所」がいたるところに、150箇所以上あったと言われているのです。当時の朝鮮あるいは沖縄の女性を日本の兵隊たちは性奴隷としたのです。しかし金儲け、商売だっただろうと言う人がいます。軍隊のなかで使われるのは現金ではなく、軍隊のなかだけで通用する「軍票」という言わばチケットです。女性たちがそんなものを何枚もらっても財産にはなりません。沖縄では、学校やムラの有力者の比較的大きな家や、ガマと呼ばれる自然の鍾乳洞までが慰安所にされました。沖縄の人びとはそれらを目撃しているのです。
私は沖縄で児童養護施設、昔の言い方だと孤児院という施設の仕事をしていました。戦前、沖縄には孤児院がありませんでした。もちろん親を亡くした子どもたちはいたはずですが、親戚や地域の人びとが支え合い育てたので必要としなかったのです。けれども、沖縄戦では約1000人の孤児が発生したと言われ、日本の法律が及ばないなかで子どもたちの施設ができたのです。
こんな話を聞いています。今はもうおばあさんの年代になったある女性は、68年前、10歳の時、母と弟と3人で沖縄本島南部を逃げ回っていました。一発の銃声が母を撃ち、その方と弟は遺体の前で泣いていた。その時米兵に収容されたのだけれども、弟と別々のトラックに乗せられ以来会うことができていない。
戦争は兵士同士が撃ち合っているのではなく、そのように沖縄住民にも多くの被害をもたらしました。
沖縄戦の話をすると、それこそ1年間の授業になってしまいます。沖縄はその戦争体験があり、にもかかわらず巨大な米軍基地が存在し、沖縄は日本本土に差別されていると感じているのです。もう、これ以上の基地負担はいやだと声をあげているのです。

種のたとえ話から

今日、読んでいただいた聖所箇所は有名なイエスのたとえ話です。マルコによる福音書では4章10節以下で、イエスご自身がたとえて話す理由や内容の説明をしています。しかし、つまるところ、御言葉を聞くことの態度とか、教会、あるいは信仰の困難さの話になっています。そうすると、それはイエスの意図なのかという疑問が残ります。私には後の教会指導者がそういう話にしてしまったのではないかなと思います。
どうということかと言うと、茨のなかや、石地や、カラスに食べられてしまう種がある、それはしょうがない。しょうがないけど、良い土地に蒔かれた種が多くの実を結んだのだからそれでよかった、よかったとイエスは望んでおられるのかということです。
もしあなたが、自分が種を蒔く人であったとして、ダメな種はしょうがないと思うでしょうか。
たしかに、道端に落ちた種もあるだろう、石だらけの土地に落ちた種もあるだろう、茨のなかに落ちた種もあるかもしれない。それらはダメな種だから実らなくてもいいと思うか、いや、そもそも自分の意思でそうなったのかということです。多くの人はダメな種、しょうがない種と言うかもしれないが、イエスが種蒔く人なら、そんなことはない、それを見だし、拾い、みんなが良い土地で育つようにしないだろうか、ということです。言うまでもなく、この種は人間のことであり、種を蒔く人とは神様のことです。
皆さんのなかには教会学校を担当している人がいるかもしれませんが。教育実習をした人もいでしょう。大勢の子どもたち、いろいろな子どもたちがいるでしょう。けれども、この子は「ダメな子」「しょうがない子」などとレッテルを貼るでしょうか。最初に沖縄の話をしました。人口140万人、日本全土の面積の0・6%しかありません。沖縄はダメな、しょうがない場所でしょうか。このキャンパスは広くて華やかだけれども、たとえば障がい者の視点ではどうでしょう。道端に落ちた種、石だらけの土に落ちた種、茨のなかに落ちた種をみんなで見つけ出し、みんなが良い地で育つのはどうでしょう。みんなで30倍、60倍、100倍の実を結び、その方がいいと思いませんか。

2013年6月18日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録